

氏 名 萱 野 茂

学位（専攻分野） 博士(学術)

学 位 記 番 号 総研大乙第84号

学位授与の日付 平成13年3月23日

学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当

学 位 論 文 題 目 アイヌ民族における神送りの研究

—沙流川流域を中心に—

論文審査委員	主 査 教授	大塚 和義
	教授	石森 秀三
	助教授	佐々木 史郎
	教授	村崎 恭子（横浜国立大学）
	所長	谷本 一之（北海道立アイヌ民族研究センター）

論文内容の要旨

本論は、序章、第1、第2、第3、第4、終章の六つの章で構成した。まず序章では「研究の目的」を、第1章では「人間の送り」、第2章では「動物の送り」、第3章では「器物の送り」、第4章では「人間の魂を入れて作った神々」について、終章では「まとめ」をそれぞれ論じた。

アイヌにとって神々は人間生活に大きな影響を及ぼし、その生存さえも左右する。神々には善悪双方が存在するが、善神を敬い、祈りや供物を捧げることを忘れずにしておれば、神々は、生活資源をとだえることなく人間に与えてくれると信じていた。神々と人間とが固い絆で結ばれたよい関係こそ、もっとも重要といってよい。神々とアイヌのあるべき姿は、現代風にいうならば、人間と自然との共生である。人間と自然の循環をいつまでも持続させるためのアイヌ民族の考えが「送り」の心であり、その実践が「送りの儀式」なのである。

本論では、私が沙流川流域の二風谷において採集したユカウを中心に、他の記録資料や自分の体験をもとに具体的な事例を示しながら、送りの対象を人間、動物、器物の三つの範疇にわけて分析した。文中のユカウはローマ字およびカタカナで表記し、日本語訳をそえておいた。

人間が死んだ場合は、アイヌはキモヌパ＝山の方へ掃き出すという。もとより埋葬の儀礼は魂が先祖の国へ無事帰ることができるように丁重におこなわれるが、いっぽうで、死者のたましいが戻ってきてほしくないという、哀悼とあい矛盾する感情がふくまれているのである。これは、墓標やウトキアツ＝墓標に巻く紐を巻くという葬送具のあつかい方にもあらわれている。

動物の霊を「送る」のは、動物という神々への感謝の気持ちの表れである。たとえば熊神は、おいしい肉と暖かい毛皮と熊胆という薬を人間に与えてくれる、有り難い存在である。したがって、イヨマンテ＝熊送りという儀式がおこなわれた。これはアイヌの代表的な儀式として現在まで伝承されている。

器物の送りをおこなう理由は、アイヌは日常使っている道具の一つひとつにも魂が宿っていると考え、物を大切に扱うとともに、その霊を送ることによって、器物の神へ感謝の意を表しているものである。

アイヌ（人間）は、神のかたちを自らに似せて作ることがある。よもぎを束ねて、心臓が五つあるもので、その形象は、最も身近で頼みともする火の神へまず報告し、対面させる。それによってはじめて、神としての力をもつ。そしてその役目が終わった時、再び送りをされる。そのほか、狐、貂、あほう鳥などの頭神に対するあつかいもかたちはことなるものの同様の仕組みになっている。

ウエペケレ＝昔話にはものと神の関わりがしばしば語られている。これによって、自然とのつきあい方や様々な生活の知恵を受け継いできたのである。すなわち、昔話は生活教典であり、道徳教育はこれを介して行われていたことがわかる。

アイヌ文化の根幹をなすものは、「送り」の観念、つまり心である。アイヌは、生活に必要な資源いっさいを人間（アイヌ）に与えてくれるのは、神々であると考えていたからである。本論は、これまで統一的に論じられることのなかったアイヌ民族の「送り」の観念を、体系づけることを目的としたものである。

論文の審査結果の要旨

本論文は、アイヌ社会における筆者自身の実体験に基づく資料によって、人間の「送り」、動物の「送り」、および器物の「送り」の三つの送り儀礼を実証的に考察して、アイヌ民族の「送り」の観念を体系づけることを目的としたものである。序章、第1～第4章、終章の6章から構成されており、まず序章では、研究の目的と本論文の学史的な位置づけを行っている。ついで第1章では「人間の送り」、すなわち死者の魂を先祖たちのいる世界に送る葬送儀礼を通して、生者と死者の関係を述べる。第2章では「動物の送り」として、山のクマ穴で捕らえた仔グマを1年間飼育し、山の神から遣わされた客人として歓待して送る「イヨマンテ」の本質を明らかにする。第3章は「器物の送り」で、そこでは自製品に限らず、交易で入手した器物でも、それが生活の道具として機能している限り神であり、破損して使用に耐えなくなったときに感謝を込めて送らなくてはならないというアイヌ独自の「もの」に対する態度や観念が詳しく述べられている。第4章は「身近な神々の送り」として、先述の三つの枠には収まらない他の神々に対する送りについて述べている。そして最後の章では、これまで各章で述べてきた神々の送りこそアイヌ文化の核心であると結論づけている。

申請者は、卓越した技を持つ木彫工芸をはじめ伝統的な生活用具作りを動機にして研究を始めている。この点は、アイヌ研究において言語文化研究者として優れた業績を挙げた知里真志保と研究の出発点を異にしている。知里は言語の研究を基礎にして次第にアイヌ文化全体に研究を広げていった。それに対して申請者は「もの」との対話が研究の起点になっており、「もの」を作り、使い、そしてその役目を果たし終ったものを神の世界に「送る」という儀礼を中心にアイヌ文化の本質を明らかにしようとしている点で、知里真志保の研究とは視野も方法も異なる。しかし、言語が文化の核心をなすという認識は両者に共通している。申請者はアイヌ文化の核心をなし、これを持続させる原動力となるものはアイヌ語であるとした。この民族語を継承し、先住民族アイヌが社会的に自分の文化に誇りを持って生きるためには、アイヌの心の原点ともいえるべき「神送り」儀礼の研究に焦点を当てなければならないということから、この研究に没頭したのであり、これに対する熱意は本論文の記述から十分にくみ取ることができる。

本論文の評価としては、まず第一に、アイヌ文化の根幹をなし、彼らの生活戦略に欠かせない「カムイ」という存在の意味と役割を、その本来いるべき国へ「送る」という儀礼の分析を通して明らかにした点が挙げられる。このカムイの意味と役割はこれまで体系的、統一的に論じられることがなかったために、本論文の価値は非常に高い。ことに日本語で「神」と表現されるアイヌのカムイが人間に対して超越的存在ではなく、しかも幅の広い意味と役割を持っている点を詳細かつ具体的に論じた点は高く評価できる。

評価の第二としては、申請者が生活者の立場から論じた点を挙げることができる。本論文の資料は、すべて申請者の実体験と身近にいた古老たちとの交わりによって集められており、参与観察としてはこれ以上恵まれた立場はない。例えば、「人間の送り」、すなわち葬送儀礼については、他者にその内容を語ることすら戒められていることから、外部のものには観察はもとより聞き取り調査すら非常に難しかった。しかし、申請者は自ら当事者として参加、あるいは主宰した経験を持っていることから、その記述は詳細且つ具体的

で、信頼性が高い。他の送り儀礼についても、近親者や近隣の人々のやり方を観察、聞き取りするだけでなく、自ら主宰した経験を持っている。

評価の第三としては、観察、記述の対象を厳密に限定し、あくまでも北海道の沙流川中流域の二風谷コタンにおける「神送り儀礼」を通じたアイヌとカムイの関係のモデル化を行っている点である。従来のアイヌ研究では特定地域での事例をあたかもアイヌ文化全体のモデルのように論じることが多かったが、アイヌの世界は北海道だけでなく、千島列島やサハリンにも及ぶ広大なものである。申請者が対象を地理的に限定し、実体験に基づいて実証的に論じたことにより、その記述の信頼性が大きく向上しているのである。

しかし他方で、申請者が論じた二風谷コタンの事例がアイヌ世界の多様な文化の中でいかなる位置づけが可能なのか、すなわち他地域の事例と比較することで自らの研究対象を相対化するという作業が必要であるが、他地域では申請者のような実証的で詳細な儀礼研究はなされてこなかったことでもあり、二風谷での事例がアイヌ文化全体の中でどのような位置を与えられるのかということは、今後の課題である。とはいえ、本論文は詳細で信頼性の高いデータと生活者としての視点によってアイヌの文化像を見事に描ききっており、学位授与に値するものと評価できる。